

ハノイ日本人学校における進路資料室開設と進路便り発行への取り組み

前ハノイ日本人学校 教諭

北海道沙流郡日高町立厚賀中学校 教諭 青谷 正人

キーワード：進路指導，高校入試，進路便り，進路資料室

1. はじめに

ハノイ日本人学校（以下、本校と略す）は、児童・生徒数が250名以下の中規模の在外教育施設であり、設立から20年を経ている比較若い日本人学校でもある。どこの在外教育施設も同じであろうが、本校でも中学部は学年が上がるに従って、生徒数が減少していく傾向にある。これは、高校進学を念頭に早い段階で保護者が帰国させているから、インター校へ進学するならば早い段階で慣れさせたいから、などと推察される。その為、中学部第3学年の生徒数は少ない。赴任期間中の2年間では、本校の中学部卒業学年の人数は平成20年度で11名、平成21年度で9名であった。

しかし、少人数とは言え、一人ひとりの帰国予定の地域は異なっており、それぞれの都道府県によって、公立高等学校入学者選抜方式が違って来る。また、海外在住の不安もあり、国内私立高等学校との併願も多い上、インター校への進学も視野に入れる場合も出てくる。本校ではなかったが、他の在外教育施設では、現地校への進学もここに入ってくることもあるだろう。その為、国内でも高校入試は多忙な業務だが、在外教育施設ではさらに神経をすり減らすこととなる。加えて、国内各地から派遣される教員も、派遣元の受験制度については知識や経験があっても、他の地域についてはほとんど知らないのである。

私は派遣1年目に中学部第3学年担任であった。この1年目の経験から、進路資料室と進路便りの必要性を感じ、開設・発行に向けて取り組んだ。

2. これまでの進学指導

本校におけるこれまでの進学指導は、派遣1年目の教員が中学部第3学年担任となることが基本であった。情報不足を抱える在外教育施設であるため、最新の情報を持っている者が適任と考えられていたのである。校内人事が決定し、派遣予定者との連絡が取れるようになると、新中3の進学希望校が伝えられ、関係資料を持って赴任するように伝えられた。

本校にも、進路指導委員会という組織は存在はしているが、前に述べたように個々に違う複雑な入試手続などについては、理解しづらく、赴任後は、進路指導主事として、また、中学部第3学年担任として、入試業務を一手に引き受ける形となる。前任者が支援に回ってくれることも当然あるが、前年度に経験していない都道府県については対応できない。

船便に間に合わなかった受験関係資料を、航空手荷物便で持ち込んでも、当然と言えば当然であるが、1学期も過ぎると進学希望先も変更されて行き、新しい当該年度の資料が必要となってくる。学校会計が円建てでなく、かつ、ハノイ（ベトナム）の場合、国際返信切手券（International Reply Coupon）を発行していないため、一時帰国する教員や保護者に協力をお願いする以外に方策が無く、新しい資料収集には苦労した。その際、保護者はもとより同僚たちからも快く協力をしていただいたのではあるが、航空手荷物の重量制限がある中、それぞれの家庭で日本から持ち込みたい物資の中に、学校の物品をお願いすることには心が痛んだ。

企業によっては、社員子弟のために進路相談室を設けているところもあり、保護者間でも情報交換は活発で、進

路指導主事（担任）よりも詳しい情報を持っている場合もあった。幸いにも前任者も前々任者も優秀な教員であったため、学校（担任）への不信感にはつながっていなかったが、そのプレッシャーは大きかったのである。

これらの問題を解決するため、受験関係資料作成に一段落ついた2学期おわりに、本校企画委員会に進路資料室ならびに進路便り発行を提案した。提案内容は理事会でも了承され、予算と教室が1つ確保されることとなり、開設に向けて作業が進み、平成21年度より開設・運営されることとなったのである。

これにより進路指導主事と卒業学年担任は別の者が担当することになり、私は、中学部部長の他に、進路係という新しい分掌を担うこととなる。業務内容は、進路指導主事、進路資料室運営、進路便り発行である。

3. 進路資料室開設

(1) 開設準備と資料収集

開設準備として最初に行ったのは、中学部全生徒の進路希望調査である。それぞれの進学可能性のある高等学校名を明らかにし、公立については各教育委員会へ、私立についてはそれぞれの高等学校へ、間もなく不要となる今年度の学校案内や要項を送付していただけるように連絡を取った。また、海外子女教育振興財団にも協力を依頼し、国内外で行われた「帰国生のための学校説明会・相談会」などでの残部資料を送付していただけることとなった。送付に当たっては、全ての私立高校については送料を負担していただきありがたかったが、一部、公立高校や都道府県教育委員会については、当然ながら本校負担が条件となり、前述したように断念するか、個人的に帰国予定者をお願いするしか方策はなかった。

進路資料室については、適当な本棚などがハノイでは市販されていなかったもので、掲示用パネルとともに本棚を業者に製作依頼した。また、イメージしていた展示方法に必要なマガジンラック（A4サイズ・15cm幅）も200購入したが、後に、不足することとなった。

中学部第3学年保護者にも進路資料室開設に向けて協力依頼を行った。長男長女が進学のため帰国する際には、そのほとんどが家族とともに本帰国となる。引越の際に、不要となる受験関係資料を寄贈していただけるようお願いした。高校選択のための各種資料、参考書、問題集、学習塾関係資料など、次々集まり、本当に感謝している。

(2) 展示方法

10㎡ほどの教室を進路資料室として確保していただいた。2辺に製作依頼した本棚、1辺はお知らせ用黑板と展示パネル、残り1辺も展示用パネルとした。その他に、コピー機1台、PC1台と机・椅子が設置された。各高等学校案内を掲示するために、パネルをさらに6枚使い3枚ずつで部屋を3分割し、閲覧用の8人掛け机と椅子を用意した。

本棚はA4サイズの2段組で、その中と上に、マガジンラックを設置した。本棚上のマガジンラックには、最新資料、本棚上部には昨年度資料、下部にはそれ以前の資料と年度別に仕分けをした。各マガジンラックには、都道府県ごとの公立・私立学校案内、寮のある高等学校、在外高等教育施設、教科別参考書、教科別問題集、地域別高校過去問題集、地域別学校案内集や受験案内図書、中学受験資料、帰国子女受入大学資料、地域別塾案内、各種業者の自宅テストや大規模会場模試情報、海外子女教育振興財団資料…など、分類し展示した。これは、必要資料を資料室全体から探すのではなく、必要なマガジンラックを取り出してその中だけで調べられるようにするための工夫である。

パネルには、在校生に関係する都道府県別に学校案内を引っかけておき、その場で閲覧できるようにした。保護者が本校を訪問する大きな機会（参観日や個人面談など）ごとに、パネル展示内容は変更し、できるだけ飽きないように工夫した。

(3) 保護者の協力

進路資料室開設にあたり、予算もいただけた為、シンガポールなどからUSD建てで必要図書を購入することがで

きるようになったが、それ以上に保護者の協力は大きかった。前にも述べたように、高校進学にともなって帰国するご家族から入試関係資料を寄贈していただけたのである。しかし、それだけにとどまらず、参観日など本校を訪問する際には、多くの保護者が閲覧に来て下さり、資料室運営について貴重な助言を示唆して下さるだけでなく、一時帰国の際には、塾や夏季講習のパンフレットや学校案内などを持ち帰り寄贈していただけるようになった。また、合同説明会などで得た情報も伝えてくださったのはありがたかった。年度途中で本帰国となるご家族も、帰国すればいつでも購入できるからと参考書や問題集を寄贈して下さった。不安を抱える者同士での助け合いが、進路資料室を中心に行われるようになった。その為、高校受験関係資料だけでなく、中学受験関係資料も増えてくることとなり、内容は一層充実してきた。

保護者とともに運営する進路資料室へと成長してきたのである。

(4) 進路学習

内容が充実してくるに従って、中3のための資料ばかりでなく、中2や中1の希望する資料も同時に増加してきた。1学期の進路希望調査の結果にあわせて、中3と中2の資料請求を国内外に行い、夏季休業を利用して、展示資料の入替を行った。2学期の進路希望調査の結果を基にして、冬季休業中にも入替を行った。子どもたちの興味がある高校資料が充実してきたこともあり、進路学習で資料室を利用する機会が増えたのである。それまでインターネットを通じてのみの高校調べに幅が出てくることとなった。

4. 進路便り発行（発行準備 情報収集 発行 広がり）

(1) 発行準備

本校初の進路資料室開設であるが、進路便りの発行も本校では初めての取り組みである。他の在外教育施設で発行されている進路便りを参考にして、発行準備が始まった。まず、誰に向けて発行するかということから管理職と話し合いがもたれた。国内であれば、子どもたちに向けて発行される進路便りであるが、志望校選択に向けて情報が少ないため、一番不安に感じているであろう、保護者向けに発行することとなった。

内容については、志望校選択と情報の共有をねらいに、都道府県ごとの入試制度や帰国子女枠受験における高校ごとの違い、Q&A、受験に向けたスケジュール、資料室新着情報、国内外で行われる帰国生のための合同説明会案内、大手大規模会場模試の案内、都道府県内模試案内、地域ごとの自宅模試、高校選択の指標などを計画した。地域ごと高校ごとに違う情報が、保護者間で錯綜することがないように、その違いがあることを共通理解できるように、また、資料収集の方策が分からず不安に陥らないように支援することがねらいとなった。

(2) 情報収集

海外子女教育振興財団から寄せられる情報の他、各都道府県ごとの帰国子女取り扱いの違い、各都道府県ごとの公立と私立の受験スケジュール、寮のある学校など、事前に調査を行った。保護者の希望もあり、大手大規模会場模試スケジュールや春季・夏季・直前講習申込みスケジュール、自宅模試情報などの情報収集にも取り組んだ。

各地域ごと・学校ごとの違いを知らせるという発行のねらいを満たすためには、膨大な情報が必要であり、常に情報収集をしていく必要があったのである。

(3) 掲載内容の変化

中2への進学を控えた春休みから高校入学関係書類の提出まで、月別の学校行事を織り交ぜて、大まかな2年間の進学スケジュールを、最初に掲載した。中学部生徒のほとんどが長子であるため、保護者にとっても初めての高校入試となるためである。また、国内と違い、学校見学などを中学校（部）で設定できない為、計画的に保護者の

責任の下、一時帰国を利用していただきたいというねらいがあった。

Q&Aのコーナーでは、E-mailで寄せられる質問や疑問にお答えしていた。帰国子女枠について、内申についてなどから始まったが、いつの頃からか、成績の付け方など、直接志望校選択には関係ないような中学部に対する質問も増えてきた。学力テスト（業者模試）が成績に加味されると勘違いされている方もいれば、観点別評価の意味と評定との関係なども問われるようになったのである。本校では、中学部保護者懇談会は年度当初に1回あるだけで、その後は、担任との個人面談が年に2回程度である。中学部の運営に関わって、共通理解を図る通信としての役割も担うことになった。

掲載内容に対する要望も、学年ごとに違いが出てきた。当初は、受験学年を念頭に発行されていたが、中2向け情報、中1向け情報、小6向け情報など、掲載することとなった。それぞれの学年に向けた進路便り発行を希望する声も上がったが、丁重にお断りした。

2学期からは、面接に関わる要望が増え、想定質問と模範解答を掲載するようになった。保護者からの要望であったが、掲載後、子どもたちからも様々な想定質問に対する要望が上がり、担任と相談して、進路学習でも利用できる形での内容変更となったのである。

(4) 広がり

当初は、中学部生徒と小学部第6学年教室掲示用のみの発行であったが、小6より配布希望者が始まる、最終的には、小6以上全児童・生徒への配布となった。バックナンバーを進路資料室に用意したこともあり、小5からの配布希望も始まった。中学部進学に向けての良い心構えになるなど、ありがたい言葉もいただいたが、逆に、インター校への転出や中学受験に関する質問や相談も寄せられて、收拾がつかなくなってくるという問題も出てきた。

5. おわりに

進路便り最終号に向けて、保護者へのアンケート調査を行った。9割以上の好意的な調査結果であったが、該当学年だけに絞った情報が欲しい、該当都道府県だけに絞った情報が欲しい、インター校の情報を増やして欲しいなど、要望や不満の声も一部あった。これらに対して、本校としては、中学部保護者全体に対して、進学のために帰国する方々を支援するため、進路資料室を運営し、進路便りを発行していると説明させていただいた。

かつては、日本に帰国することを前提に日本人学校に通わせていた時代もあったが、保護者の在任期間が長期化する場合や、他国への転出、年度内での帰国に向けての編入など、様々なケースが出てきている現在である。日本の高校への進学情報だけでは、不足だと言うことが分かった。また、人数的には、高校入試に対する情報よりも中学受験に関わる情報を求めている保護者の方が多いことも分かった。大都市圏の私立高校は中高一貫校が多く、最近では中高大一貫校も増加の傾向にあり、そのような選択を希望している小学部保護者も多いのである。さらには、二重国籍や保護者が永住している家庭も増えてきている。私が赴任している期間には、そのようなケースはなかったが、これからは現地校への進学を希望する生徒も出てくる可能性もある。

進路資料室と進路便り発行の立ち上げには成功したと自負しているが、今後の課題として、以上のように、今後の多様化する児童・生徒の状況に十分対応できるかが挙げられよう。また、膨大な資料の整理と理解、情報収集など担当者の負担増大も課題である。

反面、試行錯誤の中、進路資料室運営に関わっては、保護者の協力が得られるシステムが自然と築かれたのは大きな成果だと考える。理事会、企画委員会、助言を下さった保護者の皆様、国内の各学校入試担当者の皆様、教育委員会の方々、海外子女教育振興財団、各種塾の担当者のご協力に感謝しつつ、学校と保護者がつくる資料室という、とても素敵な資料室となったことに、発案から立ち上げに関わった自分としては満足している。